



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

フランクフルト日本人国際学校小学部における修学旅行

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 天野,幸輔 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174124

フランクフルト日本人国際学校小学部における修学旅行

前フランクフルト日本人国際学校 教諭

愛知県岡崎市立北中学校 教諭 天野 幸輔

キーワード：在外教育施設、フランクフルト、修学旅行、五感

1. 問題所在

在外教育施設は、時代の要請や諸企業の動向から様々な影響を受けやすい。近年の本校においては、海外派遣者の複数国にまたがる駐在とそのことによる派遣の長期化、また逆に1か所滞在が3年以内と短期化する傾向、経済状況を背景とした帰国児童生徒数の突然の増加、有名中学校受験者数の増加と小学部6年生修了後の帰国児童数の増加、が挙げられる。そのような傾向にあって、在外教育施設の修学旅行に対する保護者の期待は大きくなっていることであろう。修学旅行は泊を伴い、親元を離れることによる様々な面での学習効果は無論のこと、同窓と



化石博物館でのレクチャー

の思い出を大きく膨らませる無二の経験であると言える。では在外教育施設の児童生徒の保護者にあっては、どのような期待が込められているだろうか。

それは、派遣されたその地に児童だけでなく、保護者も存在した証とでも述べるべきものであろう。いつ帰国できるかわからない、またいつ次の国への異動となるかわからない、そして常に教室を構成する仲間が入れ替わることから深い友情を築きにくい状況の中で、児童生徒が修学旅行から無事に帰り、保護者がたくさんの出来事や思い出を耳にすることは、子どもがその瞬間に席を並べていた仲間や教師と確かにつながっていたことを確認し、感動を共有することで保護者その人も確かにその時そこに存在したこと、さらには日本人学校を選択したことが間違いではなかったことの証となるのであろう。担任した児童が帰国後、一人で渡独して友人の家に滞在して修学旅行に全日程参加し、また一人で帰国したエピソード一つとっても、本人や保護者、そして宿を貸した友人とその家族の様々な思いを感じ取ることができよう。では、本校における保護者が求める感動は、どのようなことを必要条件とするのであろうか。

まずフランクフルトは交通の要衝であることから、飛行機や高速鉄道を利用した家族旅行がさかんである。したがって、交通の便がよい場所ではなく、「有名であるがなかなか時間がかかって行きづらい場所」にすること。またその場所、つまり一時期の派遣国を満喫すること、言い換えれば「五感を使ってその国を知ることができるプログラム」にすること。そして教育内容にも高度なものを求める傾向が強い点から、「そこでしか学べないことや、より高度な学習へつながる学習成果」にすることであろう。また、つながりを確認できる場、友情を深める機会があることという観点からは、「少人数で話し合ったり、協力したりしながらの活動の保障」にすることも必要とされる。

以上のような点に鑑み、長い時間をかけて準備をした上で本校の修学旅行は実施される。本稿では2012年度における本校の修学旅行の概要¹を報告する。

2. 修学旅行のプログラムの概要

南ドイツ・ミュヘン方面への以下のプログラムの全行程を、バスで移動して実施した。なおフランクフルト・

ミュンヘン間は約400キロであり、アウトバーンを利用して自動車で移動する場合、渋滞なしで約3時間半かかる。

(1) 目的

- ①日頃の学校生活では経験できないドイツの歴史、自然、芸術等に直接ふれる活動を行う。
- ②集団生活を通して、児童相互のよりよい関係を築き、今後の学校生活をより充実させる。

(2) 期間 8月28日(火)～8月31日(金)3泊4日

(3) 目的地 バイエルン州 ミュンヘン。キーム湖・ベルヒテスガルテン方面

(4) 交通手段 貸し切りバス(1台) キーム湖とケーニツヒ湖では観光船も利用

(5) 参加児童 6年1組(男子10名、女子9名、計19名)、2組(男子10名、女子9名、計19名)
合計39名(男子20名、女子19名)

(6) 引率教員 1組担任、2組担任、現地採用教員、教頭(計4名)

(7) 旅程の概略

- ①第1日 美術館(アルテピナコテーク)見学、ミュンヘン市庁舎周辺散策、ホテル着
- ②第2日 ダッハウ収容所見学、ドイツ博物館見学、キーム湖ホテル着、フラウエン島散策
- ③第3日 岩塩坑見学、ケーニツヒ湖周辺散策、キーム湖ホテル着(連泊)
- ④第4日 化石博物館見学、化石採掘体験

3. 学習の詳細(抜粋)

(1) 美術館(アルテピナコテーク)見学

欧州にあっては、ドイツ国内はもとより、どの隣国においても多くの美術館にわずかな入場料で入場できる。教科書に載っている絵を実際に見ることができ、またそのような画家の別の作品やその画家を取り上げた美術館にも行ける。本校では夏休みの課題として、美術科から美術館のレポートが課されるほどである。

修学旅行では、美術館での作品鑑賞が共通体験となり、作品の評価について自分とは全く違った視点や価値観に出会える機会となる。「その美術館には行ったことがある」と豪語する児童も、仲間から全く自分とは違う印象を語られて考えこむこともある。そうした体験を促進するため、自分の気に入った絵画の前で教師に写真を撮ってもらうことにしている。その写真を材料に終了後、お互いに報告したり、レポートを執筆したりする。これまではさほどではなかった絵画鑑賞も、共通体験となると児童にとって新たな発見の宝庫となる。

(2) ダッハウ収容所見学

ドイツから帰国するとまず間違いなく質問されるのは、「ナチスに関連する歴史について何を学んできたか」ということであるという。この点については、本校では学年が進むにつれて様々な授業の枠組みで繰り返し取り上げ、人権意識や歴史認識を育成している。その意味で、ドイツに現在も数多く残る収容所関連施設について知ることには大きな意味がある。しかし「訪問による見学」となると考慮しなくてはならない点が多い²。それは例えば、小学生でどの程度理解できるか、何に重点をおいて見学させるか、気分が悪くなった児童が出たらどうするか、といったことである。

それには本校として、事前学習を充実させることなどで対応している。歴史学者である事務局長による特別授業とフランクフルトのユダヤ人関連文化財の訪問学習³、担任による道徳の時間で第2次世界大戦下の欧州を舞台にした資料を用いた授業など、1学期に約10時限にわたって重層的に行っている。またダッハウ収容所を選択する理由として、最初期からある収容所であり、もともと政治犯への強制労働を主たる目的としており、いわゆる絶滅収容所ほどの残虐な施設ではなかった点がある。現地ではガス室やクレマトリウム(焼却炉)の内部見学は本人の意思に任されている。さらにはこうした学習でそもそも気持ち悪くなること自体、健康な反応ととらえており、随所で担任が声をかけて、見学の中止や休憩を促している。

それらが奏功し、全員が施設内全箇所を実際に見学するとともに、旅行後の道徳の時間ではさらに体験を経験に深められたような意見が出された⁴。見学後のバスの中ではだれも話さない沈黙が続き、児童それぞれの中で

学習内容の大きさを感じ取ることができた。

(3) ドイツ博物館見学

ドイツの産業界が生み出したありとあらゆるものが、時代を追って展示されている博物館である。無骨とも形容しうる展示方法であり、斬新さや奇抜さはないが、全てを余すことなく展示しようとするドイツ人気質を体感できるとも言える。飛行機の旅が好きな児童が多いが、昔の飛行機の頼りなさに驚いたり、発電機・発電所の仕組みを見て日本とは電気の周波数が違う理由に感心したりしていた。

こうした展示の背景には、実学重視の日本にはなかなか根付かない「教養」といったものを感じることができるとも言える。もちろんなくても生きてはいけるが、知っていることで人生を豊かにしてくれる教養とは、こうした博物館でも育まれるものなのであろう。自分には興味がないものであっても、班の仲間が希望すれば見ないわけにはいかない。しかしそのことが自分の知の領域を驚きをもって広げる機会になっているようだった。

(4) キーム湖, フ라우エン島散策

フラウエン島には、オーストリアとの国境付近のキーム湖畔に建つ、長年利用しているホテルの前の棧橋から舟で約10分で到着できる。緑の多いドイツであるが、島の植生には特徴がある。また真夏の時期にあって、肌で感じる風に町との違いが自ずと感じられる。それらとともに女子修道院などの文化財を、班ごとに相談して訪問して見学する。その後、所定の時間にレストランに集合し、夕食をとる。ここでは地元の湖と川で捕れた魚料理が中心である。南ドイツ地方の特色ある料理とともに、国内では少ない魚料理を堪能できる場ととらえている。待っている間に大変よい香りがしてくる。寿司は日本料理屋でよく口にしている児童たちも、淡水魚が様々な方法で加工されていく香りを楽しむことは少ないようである。

(5) 岩塩坑見学

海水から精製した塩を利用する日本と大きく異なり、欧州では岩塩が利用されることが多い。巨大な地殻変動を経て、地下に閉じ込められた海水の水分が減ってできあがった岩塩坑が各地に存在する。

ここでは専用をつなぎを服の上から着て入場する。かなりのスピードのトロッコで地下深く下ると、露出した顔の部分にはかなり寒い空気を感じる。そしてさらに2回、採掘作業者が利用していた大きな木製の滑り台を勢よく降りて進んでいく。そして岩塩坑のでき方やポンプの歴史を展示でたどりながらたどりつくのは、大きな塩水の池である。澄み切った水の中を大きな船で向こう岸にわたっていくが、大音響とともに壁に様々な映像が映し出される。地下数百メートルにいることを忘れてしまうほどの演出を楽しめる。そして降りたところでは、実際に塩水を口にすることができる。

日本人学校の特色として、小学部と中学部が併設されているため、中学校教師によるより専門的な授業が受けられる点が挙げられる。岩塩坑については中学部の理科教師が事前学習の場を設けていた。

(6) ケーニツヒ湖周辺散策

国立自然公園に指定されているケーニツヒ湖とその周辺を訪れる。舟で湖を奥へと進むと、最も空気が澄んで音の反響が楽しめる場所で船が止まる。ガイドがトランペットを手にして立ち上がり、演奏するとうつくしいこだまが返ってくる。乗船しているだれもが全身を耳にして音を楽しむ時間である。環境に関心の高いドイツであり、舟も電気で動くものを使うことで湖の空気を守っている。

また途中のバルトロメオ教会付近で下船して、自然散策をする。大部分の児童は靴を脱ぎ、浅瀬で水遊びを楽しんだ。山々に囲まれる中で、冷たい水に足を浸すことで、大自然を身近に感じる体験となる。



ケーニツヒ湖, バルトロメオ教会そば

(7) 化石博物館見学, 化石採掘体験

ドイツからは、例えばネアンデルタール人の骨や始祖鳥の化石など、多くの珍しく貴重な化石が発掘されている。化石博物館では、目の前ですぐそばの採掘場から出土した児童の目にもわかりやすいほどに興味を引く多くの化石を、説明を受けながら見ることができる。魚が小魚にかみついた瞬間の化石の前では、児童の歓声が聞こえてくる。そしてそのすぐ後には実際に自分が採掘を体験でき、見つけた物は原則として持ち帰ることができるのである。児童は興奮してくるのも当然のことである。

大きなすり鉢状の採掘場では、児童たちは思い思いのところに陣取り、化石掘りを体験する。仲間と話しながら情報を交換して作業を進める者や、熱中して口も利かずにあちこちと場所を変えて掘り続ける者など、その取り組み方もそれぞれである。グローブをしてはいるが、固い石や岩、古い地層に触れ続けることは、人生でそうあることではない。約1時間、古代へと思いをはせる時間に児童は没頭して、バスでの帰路に就いた。

4. 問題点と考察

(1) 事後保護者アンケートから

アンケートからは、プログラム全体には大きな支持が寄せられていることがわかった。初日のミュンヘンは大都市であり、観光地であることから家族で訪れた児童が多かったが、帰ってから思い出話で盛り上がったところがあることも報告されている。

またけんかなどが一切起きなかったことも保護者はうれしかったようだ。やはり思い出づくりの行事を成功させるには、日ごろの学級づくりがまずは大切という古くて新しい問題がついて回るようである。

(2) 安全情報について

今回は往路で、第2次大戦時の不発弾処理が急きょ実施されたため、う回路を利用した。ドイツ人ドライバーはラジオで承知しており、断ることなく道を選択した。しかし引率教員は気づかず、学校へ連絡をしていなかった。保護者はミュンヘン方面の情報を追いつけており、気づいた数軒の家庭から学校への問い合わせがあった。ドライバーと細かく情報交換をして、こうした無用な心配を保護者にさせないシステムが必要である。

(3) 実査には化石が見つかりにくい採掘体験

本校ではこの採掘場所を利用し続けているが、なかなか児童自身が見つけることがなく、土産物として購入するにとどまっている。他にも化石採掘体験ができる場所があるため、経路を変更して実際に本物を自分の手で見つけやすい場に変更することが考えられる。4日目がこの採掘場の訪問だけとなっているのは、場所の便の悪さからである。さらに夕刻のラッシュとも重なり、毎年予定時間よりかなり遅れて学校に到着している。この4日目のプログラムを変更することで、様々な問題が解消される可能性を残している。

注

- 1 様々な観点から毎年見直しを行いながら修学旅行は実施されている。修学旅行に限らず教育課程の全体が改革の中にある。
- 2 ドイツの学校においては、歴史は現代から過去へとさかのぼる方法で教授されるケースが多い。その最終段階として、高等学校段階において収容所の見学が組み込まれている。岡裕人『忘却に抵抗するドイツ』(2012) 大月書店
- 3 フランクフルトはロスチャイルド家を輩出したユダヤ人ゲットーや墓地、2つのユダヤ人関連博物館を有する。それらとともに教会を訪れ、キリスト教との関連などを学ぶ半日のプログラムである。
- 4 杉原千畝を扱った資料のユダヤ人女性の訴えを聞く場面で、「ダッハウを見学した私たちは、この時の杉原と同じ体験をしたのではないか」と述べた児童がいた。